

談話室の小平先生

北海道大学 中村 郁

(「モジュライと変形理論」数学の楽しみ 20号,2000年8月より抜粋)

私の学生時代と言えば、米ソの宇宙開発競走の一方で、ベトナム戦争とりわけアメリカ軍の北爆が始まって、それが熾烈に続いていた時代であった。東大で言えば、小平先生が帰国され、ストライキ、全共闘の時計台闘争、そして入学試験の中止にまでいたるあの時代である。数学科のある理学部3号館が全共闘に封鎖される、いやそういうことを言うのは挑発だ、という議論があって、ともかくも大勢の学生が大学に泊り込んだのもその頃である。冬の大学の夜は冷え込みが厳しい。それに泊り込みと言っても、上に一枚下に一枚新聞紙が合計2枚、これだけでコンクリートの床の上に寝たのである。なにがしかの小競り合いがあり、いくらかのけが人がでた。そうして時計台の攻防戦があって入試が中止になって、長期のストライキも終わった。それからさらに半年後、私はなぜか(理由が思い出せない)ふたたび大学に泊まり込んでいた。やはり新聞紙2枚であった。夜中12時頃であったろうか、アポロ11号の月面着陸のニュースが流れた。アポロ計画の資料からすると昭和44年7月20日前後であったろう。

「ここは本当に素晴らしい。」

そのときのアームストロングの言葉である。人類の月面第一歩であった。

「アメリカ帝国主義の勝利かあー」

誰かがそう言った。そういう時代だった。

私が修士に進んだころは東大の代数幾何の土曜セミナーの盛んな時期であった。飯高さんが小平次元の理論を始めた頃で、飯高さんは土曜セミナーの講演を終えるころ、

「いろいろ問題があるけれどどれもみんな難しい」

というようなことを言った。小平先生が

「どんな問題がありますか？」

と質問されると、飯高さんはさらさらっと10くらい問題を挙げた。そのうちのいくつかは重要ということで懸賞金がついた。賞金の最高額は多重種数の変形不変性で、これは10万円だった。そのころ大学卒の初任給は5万円程度だったからこれはかなりの金額なのだが、ということはとてもすぐに解けそ

うな気のする問題ではなかった。

当時は談話室が学生教官の両方にとってのたまり場で、同級生のなかでは常連は、岡本和夫、岡睦雄だったと思う。研究上の議論から雑談になり、あるいは始めから最後まで雑談で談話室にたむろする人は多かった。その頃談話室には三宅さんという中年過ぎのおばさんがいて、いつもお茶をいれてくれた。昔の小学校で言えば小使いさんのような人である。われわれ学生はお茶ばかりでなくお菓子もよくご馳走になった。あるとき

「明日の試験のあとケーキを食べたいな」

と言ったら、本当に試験の終わるころ買って待っていてくれたこともあった。三宅さんは気さくな人柄ということもあって、下宿生の相談相手兼家族代わりという役割を果たしていた。最近では定員削減の影響で、こういう人達が大学から姿を消してしまった。しかし、教育だ、研究だと言っても所詮は人間のすることである。仮に財政的には無駄のように見えても、こういう人間的なゆとりのある大学の方が長い目で見れば強いのだと思う。

修士1年のセミナーは物理学科から移ってきた赤尾君とふたりで、セミナーの最中小平先生はよく居眠りをしておられた。(実は私もセミナーでよく居眠りをする。)小平先生には実質的にはセミナーより談話室で教えていただいた。(私の勤務先には学生の出入りする談話室はない。私の学生はもしかしたら困っている?)談話室には黒板があった。この黒板では同級生のレポートの相談、コンパの打ち合わせから、大先生同士の議論まで何でもありだった。そうしてときどきは質問しなくても小平先生の方から

「この前のあれね、こうやると存在しないことわかりますよ。」

という具合に教えていただけたのだ。質問の解答を手書きのノートでいただいたこともある。こういう先生の弟子というのは得だと思う。話しが一段落すると「お茶を飲みに行きませんか」となって、当時理学部3号館の裏にあったアートコーヒーなどに行くのであった。小平先生の同級の後藤守邦先生が東大に来られたとき、私は小平先生から紹介されてそのころの私自身の研究についてこの黒板で説明したことがある。例によってモタモタやったのだが、どうも後藤先生はピンとこなかったようで、小平先生が説明し直して下さった。私より短い説明でずっとよく分かる説明であった。説明というのはこうするものかと感心して見ていた。小平先生の説明というのはいつも過不足なく分かりやすかった。手書きのノートもそうだった。

実のところ、教えていただいたことはこんなことにはとどまらなかった。いつだったか、談話室の三宅さんがしみじみとこう言ったことがある。

「あんなに熱心に学生の面倒見てらした小平先生見たことなかったわよ。あなた、幸せよ。」

この時期先生とお話して賞金 10 万円の問題の反例ができていたことが分かった。昭和 46 年 11 月のことで、小平先生が理学部長に就任されたばかりの頃である。その反例は問題に止めを刺すというのではなくて、対象を代数多様体に限るといような自然な仮定を課す必要がある、ということを示した点に意義があった。肯定的な解決ではないので（一般的な十分条件を見つけるほうがもっと価値があるということもある）賞金 10 万円の 10 分の 1 を小平先生と私の二人がもらうことになった。もっとも、小平先生に差し上げるのはおそれ多いということで私だけが半分の 5 千円をいただいた。そのころ育英会の奨学金は学部学生だと 1 ヶ月 8 千円であった。賞金は当時プリンストンに滞在中の飯高さんから航空便で届いた。

しかし上野さんとの共著の論文のおかげで賞金はさらに千円増えた。この共著の論文は賞金 3 千円の問題を解決したので、寄与が（ずっと）多かった上野さんは 2 千円を受け取り、盛んに

「何だか悪いな」

と言っていた。私は学生だったので遠慮なくいただいて澄ましていた。何に使ったかは覚えていない。その後宝くじを 2, 3 度買ったことがあるが当たったことは一度もない。だから 6 千円はまぐれ当たりもいいところだったが、何かにつけ学生を励まそうということで、周りの先生たちがいろいろ考えて下さっているのが分かってありがたいと思った。こういう周囲の励ましがなかったら私はきっと予選落ちしていたのではないかと思う。実際当時は上と下の優秀な人々に囲まれて、私の気分は 9 回裏 2 死走者無し敗色濃厚、バッターボックスに立って今ツーストライク・ノーボールというところだったのだ。しかも同級生の赤尾君はものすごく優秀なひとで、私は始めからずっと圧倒され放しであった。彼は同級生というより、いつも質問に答えてくれる私のもうひとりの先生であった。

そうこうするうち、昭和 47 年 2 月には博士課程の面接試験があった。そのときの質問のひとつは、

「賞金は合計いくらもらったの？ どんな問題だったの？」

だった。もうひとつは

「どこか助手の口があったらどうしますか？」

で、聞かれたのはそれだけだった。小平先生もそのときの試験官のひとりで、ニコニコしながらにかボソボソ話すと、他の先生たちと一緒に愉快そうに笑われた。体をゆるするようにして、本当に愉快そうだった。それで面接試験は終わった。当時の面接試験というのはだいたいこんなもので、友人のみんな似たり寄ったりだったらしい。卒業の近づいた 3 月、赤尾君は東大の助手に決まり、そのあと私は名古屋大学の助手に決まった。今より就職事情はずっとよかった。しかしそれにしても、私は最初の論文をまだ投稿すらして

いなかった。のんびりした時代だった。今の若い人たちには想像もつかないことだろう。

もうひとつ鮮明に覚えていることがある。たぶん学部長に就任されてから間もなくの頃だと思う、小平先生は一度もらされたことがある。

「この頃よく眠れなくて困るんです。」

やはりいろいろ大変だったのだろうと思う。昭和48年4月小平先生は理学部長を辞職された。その後お会いしたとき、

「どうも体の調子が悪いので、教授会で『辞めます』と言ったら辞めさせてくれました。」

そう話しておられた。

ところで飯高さんの問題の賞金のことだが、あれはきっともう時効だと思う。